世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

沖縄戦後の適応過程に体験の開示と共有が及ぼす影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島尻, 楓, 小西, 聖子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/948

■研究報告

沖縄戦後の適応過程に体験の開示と共有が及ぼす影響

島尻　楓[1)]、小西　聖子[2)]
1）沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
2）武蔵野大学人間科学部

問題と背景

第二次世界大戦から73年が経過し、戦争を自らの体験とする世代は、いまや残り少ない。沖縄は、第二次世界大戦中、日本で唯一の地上戦を経験し、約3か月にわたる軍民混在の激しい地上戦の中、県民約10万人が犠牲となった。沖縄戦を生きぬいた人の中には、PTSDやうつ病、適応障害、アルコール依存症など、様々な精神被害が絡みあって発症したことが報告されている（蟻塚、2014）。また、蟻塚（2014）は、沖縄戦体験者の中には、高齢になってもPTSDのような症状がみられると述べている。

沖縄戦体験者が、戦後70年以上経過してもなお心の傷に悩まされ、苦しんでいることが報告されている一方で、沖縄戦体験者の回復過程に焦点を当てた研究も存在する。終戦67年目の調査では、戦争を体験した高齢者の40%以上がPTSDハイリスク群だったにもかかわらず、精神的健康は良好であったことが報告されている（當山ら、2013）。また、終戦55年目に実施された調査では、沖縄戦体験者が戦争を否定的に捉えている割合よりも肯定的に捉えている割合の方が高いことが報告されている（吉川・田中、2004）。さらに、吉川（2004）は、戦争体験者の回復過程に影響を及ぼす要因を検討している。吉川の研究において回復の定義とは、「戦争体験に対する捉え方の肯定的な変化」である。この研究では、戦争体験者へインタビューを実施し、戦争体験に対する捉え方の変化に影響を与えた事柄と変化の過程を質問している。その結果、捉え方が変化したきっけかけの1つとして、「体験の開示と共有」が報告されており、体験の開示と共有によって、自分の人生にとっての戦争の意味を考える機会になっていると、吉川は考察している。

以上のことから、戦争体験からの回復には体験の開示と共有が有効であることが示唆されているが、体験の開示と共有を通して、戦争体験を意味づけし、捉え直していく過程を示した研究は数少ない。

目的

本研究では、体験の開示と共有を一つの形態としている沖縄戦の語り部の方を対象にインタビューを行い、語り部活動を通して、戦争体験者が戦争をどのように意味づけをしたのか、その過程を明らかにすることを目的とする。また、戦争体験そのものだけに焦点を当てるのではなく、戦争による喪失体験など、戦争と関連のある出来事への意味づけの過程も明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

沖縄戦の語り部活動をしている沖縄戦体験者3名である。リクルート方法は、対象者が所属しているボランティア団体に連絡をし、研究の趣旨を口頭で説明した後で、研究協力のお願いと説明・同意書・同意撤回書の文章を郵送した。ボランティア団体から協力の同意が得られた後、ボランティア団体の方が語り部の方の健康面やスケジュールに配慮してリクルートした。その後、筆者が語り部の方に研究の概要・同意書・同意撤回書の文章を郵送し、インタビュー当日に同意書を回収した。以下、調査対象者のプロフィールである。

対象者	戦争当時	調査時の年齢
Aさん	民間人(7歳)	80歳
Bさん	民間人(10歳)	82歳
Cさん	学徒隊(白梅)(16歳)	88歳

調査期間

2017年8月に1回目のインタビューを3名に実施した。その後、同年11月に2回目のインタビューを2名に実施した。1名は2回目のインタビューの同意を得ることができなかったため、実施しなかった。

調査方法

ライフストーリーインタビューを実施した。インタビューの質問項目を作成する際には、対象者の情報を本や新聞記事で入手し、その情報に基づいて各々のライフストーリーに沿った形で質問項目を作成した。2回目のインタビューでは、1回目のインタビューの聞き取りで得た情報から新たに質問項目を作成した。実際の面接場面では、対象者の語りを尊重し、場面に合わせて質問内容を変更、追加した。1回の面接で1人約3時間実施し、1時間につき10～20分の休憩をはさんだ。

分析方法

ナラティブ分析を中心に行った。Labov（1972）が提唱する構造的分析アプローチを参考にし、「orientation」「complication」「evolution」の3つを軸にして分析を行った。表記の仕方は、西倉（2004）を参考にし、「時期と状況」「出来事の配列」「評価」とした。また、構造的分析アプローチでは膨大なデータをコンパクトに要約できるが、そのことで対象者の語られた内容が読み手に伝わりにくい可能性がある為、Lavob（1972）が提唱する分析方法に付け加える形で、インタビュー内容を筆者が要約したり、得られた語りの内容の一部をそのまま記載した。

データの整理方法

インタビューを録音したものをもとに逐語録を作成した。逐語禄は、録音された時系列のままにすべて書き起こして作成し、句点で改行し、行番号をふった。1回目のインタビュー時に得られたデータには行番号の冒頭に1を記し、2回目のインタビュー時に得られたデー

タには２を記した。その後、逐語録から、戦争に関連する出来事について語っている重要な部分を選択して、選択した内容をいくつかの人生時期に区分し、区分された各人生時期に＜大見出し＞と＜小見出し＞をつけた。また、筆者の言葉には＜＞で記し、語りの内容が分かりづらいと思われる個所は、（ ）づけで補足した。

結果

A さんの語り

表１　A さんのライフストーリーの概略

7 歳	戦争を体験。戦争により父親、母親、兄、妹２人が亡くなる。
7 歳～	終戦直後、悲嘆・トラウマ反応が表出。親戚の家を転々として生活を送る。
30 歳頃	夫と一緒に九州へ移住する。
35 歳頃	語り部の活動を始める。
65 歳頃	沖縄に戻り、語り部活動をおこなう。

Ⅰ　戦争体験の物語

戦時中、A さんは７歳であった。戦前は、父親、母親、兄（9 歳）、妹２人（1 歳、3 歳）と生活を送っていた。戦争が始まると、父親は防衛隊として召集され、戦場では A さん、母親、兄、妹２人の５名で逃げ回る。艦砲射撃や迫撃砲が飛び交う中、南部へと逃げる道中で、A さんと妹２人は、母親と兄とはぐれる。A さん達は母親と兄を必死で探したが、死体で発見する。A さんは幼い妹２人と一緒に戦場を逃げ回るが、妹２人も息絶え、戦場には A さんだけが１人取り残される。妹が亡くなったすぐ後に、A さんは気を失ったが、米兵士に助けられ、収容所へと送られた。

Ⅱ　親がいないことの苦悩の物語

収容所で母方の祖母と再会し、10 歳頃まで祖母と生活を送る。その間、悲しみにくれて泣き続けたこと、戦争の悪夢をみていたことを語る。その後は親戚の家を転々とし、親がいないことを理由に不当な扱いを受けてきたことを語る。

戦後の話ができなかったストーリー

	［時期と状況］
1―43	戦争体験はずっと語ってはいるけど、戦争後の話というのは、「私できない。」と言って断ったことは何回もあるんです。
	［出来事の配列］・［評価］
1―44	あのー、なぜならばね、戦争があって家族がみんな死んでしまって、一人ぼっちになってしまったときに、生きる術もないし、だからそういう中で親戚の家をぐるぐる回されて、だからあまりにも悲しすぎるから、私にはひとりになってからの話を聞かないでって。
1―50	でも、今は沖縄の歴史の中、沖縄の歴史というのかな、沖縄の習慣の中で戦争で親を亡くした子ども達が、子ども達がどういう風に扱われたか、ちゃんとお話ししなければいけないなって。

Ⅲ　他県での語り部活動の物語

Aさんは、沖縄県外に在住時、35歳頃に語り部として活動するようになる。初めは、周囲から沖縄のことを知りたいと声が上がったため、教会で沖縄戦について話した。教会でAさんの話を聞いていた中学校の教員から、学校でも沖縄戦のことを話しほしいと頼まれて引き受けるが、その学校は生徒が警察沙汰を起こすような学校であった。

語り部のストーリー

	［時期と状態］
1―550	学校に呼ばれまして、全体となると多いですから、まずは、一番暴れてる3年生だけを、体育館に集めましてね、夏の暑い日に皆そこに座らされて、あのー、いるわけですね。
1―551	そしてその間はですね、先生方は、とにかく暴れているもんだから、先生方も抑えきれないと言ってから、棒を持ってですね、行ったり来たりしているわけですよ。
	［出来事の配列］
1―559	でも、もう、ここまで来た以上は責任もって話さないといけないって。
1―561	「沖縄のこと聞いてくださいね。」って。
1―563	「それを聞いて、あなたたちはどう思うのか。」って。
1―564	「それでも暴れたかったら、うんと暴れてください。」って。
1―565	「私、覚悟して来てますから。」っていうことを言って、沖縄の話をね、ずっと戦争のこと、そして、あの、鉄血勤皇隊（男子学徒隊）、少年たちがいますでしょう。
1―566	あのことをずっと話していって、自分の戦争体験を話していくうちに水を打ったように静かになっているんですね。
1―567	そして、その、周りを取り巻いていた父兄の人たちが、女の人たちが多かった。
1―568	声をだして泣いてくださったもんだから。
1―569	本当にもう、子どもたちが静かになったもんだから、私も良かったって。
	［評価］
1―694	またね、沖縄の状況というのは、本土では、全くわからないわけですよね。
1―695	だから、沖縄が悲惨であるということ、父や母がどんな風に死んだかということを、是非話して皆さんにわかっていただこうって。

その後も多数の学校から語り部としての仕事を頼まれ、本格的に活動を始める。そんな中、以下のことを考えるようになったと語る。

一人になる時間は、なんとなく考えるんですね。あの時は、お父さんはどう思ってたんだろうか。お母さんはどう思ってたんだろうかって。お母さんは、私たち3人幼い者を連れて逃げなければいけなかった。大変だったろうなって。（中略）とりとめもなく、ぐるぐる考えが回って。（中略）でもね、お父さんもお母さんもね、死にたくて死んだんじゃないよねって。戦争によって理不尽に奪われたんだよね、と思いますよ。

また、Aさんは、語り部の活動を始めてから、戦争や戦争に付随する事柄等、様々なことを考えるようになったと語る。

戦争のことを語りながら、アウシュビッツ収容所こととか。第一次大戦のこととか。第二次世界大戦のこととかではなくて。その時の人たちはどうなったんだろうかと。（中略）色んなことを、やっぱり知りたいと思うから、図書館で調べたり、考えたり、考えてもわからないけれどもやりますね。そうしたことによって、人を許すことができる。（中略）自分が納得することとか、ほっとすることとか。どうしてこうなったの。あの時のこうすれば良かったんじゃないって、独り言を言ったりですね。

語り部の活動を通して、戦争で喪った家族や戦争体験と向き合う時間が増え、自身の体験と照らし合わせながら、本を読んで納得したり、ほっとする理由を探し、また疑問がでれば調べるということを繰り返し、自身の経験を解釈して意味づけようとしていたと考える。

Ⅳ　沖縄での語り部活動の物語

65歳頃、沖縄に戻ったAさんは、沖縄でも精力的に語り部活動を続けたことを語る。そんな中、最近になって生前の母親との記憶を思い出すようになったことを語る。

母親に関するストーリー

	［時期と状況］
2―1047	でも、すごく小さい時に母に手をひかれて、沖縄の電車に乗ったり、アイスケーキを食べたことがあったなぁとか、そういうことはパッと何かの拍子に思い出すんです。
2―1071	最近思い出しました。思いもよらないことですよね。
2―1072	そんな大事なことでもないのに。
	［出来事の配列］
2―1049	＜戦争の時の思い出じゃなくて、戦争以前のお母さんとの思い出を思い出すんですか。＞
2―1050	はい。
2―1051	お母さん、急いでたんだろうなって。
2―1052	私が一生懸命アイスケーキ食べてるのに、お母さんは一生懸命に私の手を引っ張っていた、とかね。

	［評価］
2―1078	多分、精神的に安定しているんだろうなって思います。
2―1079	昔の事が思い出されているのは。

Worden（2008）は、遺族が取り組むべき課題の１つとして、死者を情緒的に再配置し、生活を続けることをあげている。

A さんは戦争体験を繰り返し語り、戦争で亡くなった家族の死に意味づけをする過程を経て、戦争で亡くなった母親の記憶に支配されて思い出すことができなかった生前の母親の記憶を取り戻し、母親の喪失を今の自分の人生に組み入れ、統合し、情緒的に再配置することが可能になったと考える。

B さんの語り

表２　B さんのライフストーリーの概略

10 歳	戦争を体験。戦争で父親、父方の祖父母、母方の祖母、兄、従妹が亡くなる。
11 ～ 18 歳	復員した叔父と生活を送る。
26 歳頃	結婚。
30 歳頃	病気で夫を亡くす。
60 歳頃	戦後 50 年目を節目に本を出版する。
75 歳頃	語り部活動を始める。

Ⅰ　戦争体験の物語

戦時中、B さんは 10 歳であった。戦争が始まると、父親は軍医として召集され、戦場では、B さん、父方の祖父母、母方の祖母、兄、叔母とその子ども２人、計８名で戦場を逃げ回った。家族が目の前で次々と亡くなっていく光景を目の当たりにしながら、最終的には１人で戦場を逃げ回ることになるが、しばらくして、同じように逃げ回る人を見つけて一緒に身を隠しながら生き延びる。

Ⅱ　家族と過ごした物語

収容所で戦場ではぐれた叔母と再会する。収容所から解放された後、しばらくは自身の育った部落へと戻ることができなかったため、一緒に戦場を逃げた叔母と、その他の親族と一時的に生活を送る。その後、復員した叔父に引き取られる。

叔父との生活のストーリー

	［時期と状態］
1―765	叔父が復員して帰ってきた。
1―768	その叔父に引き取られて、私はその叔父に育てられた。
	［出来事の配列］
1―779	戦後はみんな物のない時代だから、同じように自分もなくても、負い目も苦労も何も感じない。
1―782	裕福な人がいて、自分だけがこんなだったら、引け目も辛さもあったかもしれない。
1―783	でも、社会全体が物のない時代だったから。
2―409	戦争直後でみんな、生きるので大変な状態だけども、みんな生活に追われてた。
2―411	助け合って生活するのが当たり前だった。
	［評価］
2―435	どうして戦争のことを考えなかったのか、わからないけど、とにかく成長期には戦争、戦争と自分にのしかかっていたわけではなかったね。

Kastenbaum（1969）は、一度に多くの人を喪う経験をすると、その重大さを抱えきれず、悲嘆の営みを延期させることがあると述べている。

戦争により一度に多くの家族を喪ったことが、Bさんにとって家族の死を十分に味わって悲しむことが困難であった要因の一つであると考える。

Ⅲ　夫に対する喪失感の物語

26歳頃に結婚するも、30歳頃に夫を喪ったBさんは、長い間苦しんだことを語る。

悲嘆反応のストーリー

	［時期と状態］
2―853	＜病気をしてから、１年で…ご主人が亡くなって、受け入れるまでにすごく大変だったのではないかなと思いながら聞いていました。Bさんは、ご主人を亡くされた時、どうでしたか。＞
	［出来事の配列］
2―855	でも、やっぱり色々ありますよ。
2―857	円形脱毛症に悩まされたとかね。
2―864	最近まであったんですよ。
2―872	看病している間は寝たくても眠れなかった。
2―874	ゆっくり寝てみたいという欲求に駆られていたはずなのに、亡くなった時点から今度は眠れなくなった。
2―877	それで病院に連れていかれて、精神安定剤とか睡眠薬とかを飲まされて。

2―878	それが続きました。
	［評価］
2―867	自分では考えていないつもりだけど、旦那の死というのは常にのしかかっているわけです。

Worden（2008）は、時を経て、別の近しい人の死を体験したときに悲嘆症状が出現し、その悲嘆の仕方が過剰すぎると思われる状態のことを、遅れた悲嘆反応であると述べており、もともとの喪失時に悲嘆反応の営みが適切に行われないで後回しにされ、現在の喪失として体験されている現象であると述べている。

Bさんの悲嘆反応が長期かつ過剰であることから、遅れた悲嘆反応であることが考えられる。

Ⅳ　執筆と語り部活動の物語

執筆活動を始めるきっかけのストーリー

	［時期と状態］
1―889	＜本を書くきっかけを教えて頂けますか。＞
1―890	戦後50年目という節目に。
1―891	その時にはちょうど大田知事が礎と平和記念資料館の建立の計画を進められていた。
1―892	私も平和記念資料館の設立検討委員会の１人なんです。
	［出来事の配列］
2―450	そして、月１で会議があって、偉い人達で討論して、悲惨さを伝えるためには現実を知ってもらわないといけないと、色んな話しがでた。
2―459	ただ聞いているだけだけど、私も検討委員の１人で、そういうものに出ている間に、実際に体験した者として残さないといけないなと。
2―461	そして書こうと思ったのが、そこが出発点ですね。
	［評価］
1―898	死んだらもう書けない。
1―900	私の家族の、戦争の犠牲になった足跡は消える。
1―901	そういう思いもあって書いたわけですね。
2―648	本当に何か書き残さなければ、自分の生きた証、そういうのもなくなるんじゃないかなと思う思いもあったし。

Harvey（1990）は、外傷のクライテリアを７つ挙げているが、その一つに 、外傷的事件の記憶が首尾一貫した語りものになっていること、そしてそれに相応の感情が結びついていることであると述べている。

Bさんは、戦場を一緒に逃げた叔母に、その当時の戦場の様子等を聞いて、ところどころ抜け

ている記憶の部分を補いながら、執筆活動に取り組んだことを語る。執筆活動が、断片的な記憶をつなぎ合わせて一貫したストーリーを作る作業になっていたと考える。

語り部になるきっかけのストーリー

	［時期と状態］
1―923	これ（Bさんが執筆した本）を読んだボランティアガイドの中の方が、「こんな経験をした人は、中にはあんまりいないから、ぜひやってちょうだい。」と言って、声がかかったのが70ぐらいの時。
1―925	「いや、いや。できません。やらない。」と言って断り続けて。
1―927	74・5くらいの時に、「正式な会員としてではなくて、こういうのをお願いします。」と言われて、できるかなと思いながらポツポツやりだしたのが74・5ぐらいからかな、と思います。
	［出来事の配列］
2―528	やっぱり、ひめゆりさん　（女子学徒隊）ができませんとか、語る人が少なくなったというのを新聞で見るじゃないですか。
2―529	やっぱり、実際に体験した人がこんなにもいなくなって、語り継ぐということが、難しい時代に入ったなと思ったんで、やれることはやらなければいけないと思うようになったわけですよね。
	［評価］
2―933	私は、戦場に散った家族を犬死せたくはないと思った。
2―934	こんなことが２度とあってはならないでしょうということを、強く伝えないといけない。
2―935	それを受け止めてくれる生徒がいる。
2―936	戦争を始めてはいけないんですねと、始めないためには自分たちが頑張らなければいけないということを、ちゃんと感じ取ってくれている生徒がいる。
2―937	そういうのを見て、やってて良かったなと思います。

また、語り部になったことで起きた変化について語っている箇所を以下に示す。

何度も何度も話しているけれど、やはり、兄や祖父のことを想うと涙が出る。やはりこらえることができない。（中略）あの頃（戦後、叔父と生活していた頃）より、今語り部をしてるから、戦争のことをしょっちゅう考えるわけですよ。兄の名前を思い出すだけで涙が出るし、祖父のことを思い出せば苦しくなる。

Ｂさんは現在語り部活動を通して、家族の喪失の悲しみを消化していると考える。

Cさんの語り

（Cさんは、2回目のインタビューの同意が得られなかったため、1回のインタビューのみで考察する。）

表3　Cさんのライフストーリーの概略

12歳	第二高等女学校（戦中に白梅学徒隊として編成される）に入学。
16歳	戦争を体験。白梅学徒隊として従軍看護を経験する。
戦後～49歳	教員として働く。
49歳頃	夫の転勤で広島・長崎へ移住する。
66歳頃	被曝した方の話を聞いたことをきっかけに、本を出版する。
66歳頃	本格的に語り部活動を始める。

Ⅰ　戦争体験の物語

Cさんは、当時、沖縄で優秀な学校であった二高女に進学するが、戦争が近づくにつれて勉強をする機会が減り、授業に代わり、戦争に備えて壕を作る作業や農業をしていた。十十空襲が起きた後、国から二高女の上級生に対して看護教育を受けるように要請がでた。任意ではあったが、Cさんは要請を承諾する。

> やっぱりですね、家族は反対しました。「行かないでくれ」と。（中略）もう、娘を手元に置きたいという親心がわからない、あの時は。もう、ずーっと小学校から「お国のために」という、すっかり軍国少女でしたね。ですから、「何を言っているんですか。」と。私たちがね、お国のために看護教育というのを受ければ、おそらく看護婦さんになって、傷病兵のね、看護ができるんじゃないかと、そう思ったわけですよね。

Cさんは看護教育を受けるが、アメリカ軍の攻撃が激化し、18日で打ちきられる。その後すぐに、Cさん達は学徒隊として野戦病院へと配属され、兵隊の手術をする壕（手術場壕）で助手として手伝うようにと命令を受ける。

手術場壕のストーリー

	［時期と状況］
289	手術場壕に入ったのが、たぶん4月の中旬頃だったんじゃないかなと思うんですけれどもね。
	［出来事の配列］
306	もう、手術場壕に入ってからはですね、横になった記憶がないんです。
310	ちょっと体が空くと、岩にもたれかかって、うとうとするとね、また、すぐに声が聞こえますから、また、はっと、「はい。はい。はい。」と動き回るということでしたから。
319	たいていの兵隊さんがですね、メスを入れた途端に悲鳴を上げたんですね。

320	「よしてくれー。切らないでくれー。」とね。
323	私たちは、最初のうちは、もう見れない。
324	まぁ、しかしね、場数というのかな、毎日やっていると、ちゃんと兵隊さんを、こう、慰めるというか、「動かないでください。早めに終わりますよ。」とか、そうして、励ます側になって。
	［評価］
325	そういうふうにして、私がしたことは、学問がなくてもできたこと。
326	汚物を拭き取ったり、それから切り捨てた手足を砲弾穴に投げ込んで捨てたりね。
327	今でも、私は学徒隊がいなかったら、女子学徒隊がいなかったら、病院は成り立たなかったと思いますよ。

手術場壕で看護活動を続けていたＣさんを含め、女子学徒隊は６月４日に解散命令を受ける。Ｃさんは壕を出て、艦砲射撃の中を逃げ回り、最終的には収容所で保護され、そこで家族と再会する。

Ⅱ　戦争直後の物語

終戦直後は、働き手となる大人が復興のための作業をしている間、子どもたちを見るための学校が必要となり、早急に建設が行われた。Ｃさんは女学校出身ということで、教員として子どもたちの世話をしないかと何度も声をかけられる。最初は及び腰であったが、学校を見学し、子どもたちの元気な姿を見て、引き受けることを決意する。

私はもう、子どもたちの、なんていうのかな、元気さというか、戦争があった国の子どもたちに思えなくて。私もだんだんだんだん、もう気持ちも明るくなって。よし、これからは、戦争で負けて毎日悔しがったり、悲しくなったりしてたけれど、前向きに生きていこう、と思うようになって。（中略）あの３か月がなかったら、私はどんな人間になってたかなぁ、と思います。いつまでも戦争の傷を背負ってね、どういう人間になっていたのかなと思うんだけれどもね、子どもは本当に素晴らしい。

その後、Ｃさんは戦後初期にできた教員養成学校へ入学し、教員免許を取得し、49歳まで教員として働く。

Ⅲ　生き残った意味を見出す物語

執筆活動を始めるストーリー

［時期と状況］

582　（本土）復帰して２年目で、夫に転勤命令がきたんですよ。そこで、行ったところが広島県だったんですよ。

534　それから実際に、原爆、あのー、被害を受けた方にもいろいろとお話を聞かせてもらって。

586　また転勤は２年ごとにくるんですが、それがまた不思議なことにね、長崎だったの。

590　その時に、広島、長崎の原爆のことと同じように、沖縄の長い地上戦ね、３か月以上も続いた地上戦のことを書いて残さないと、また戦争がすっかり忘れられたら、また若者たちがお国ためにと言って、私たちのような、また、戦争にも協力するんじゃないかな、そう、協力ですよ。

591　それから、沖縄に戻って、「平和への道しるべ」を書いたわけね。

［出来事の配列］

597　書きだしてからは、資料を集めてから、半年ぐらいでは出来上がりましたけどね。

794　そして、夜中の３時ぐらいまで仕事していたけど、あの時はへこたれない。

796　広島、長崎の体験がもとになっているから、ぜひ残さなければならない、というふうになってから書き始めているから。

［評価］

798　仲間がどうやって死んでいったのか。

813　これをまず残したかった。

814　また、後はもう、戦争までの歩みね。

815　自分たちも一緒になって、なぜ、戦争に協力、協力ね。

816　進んで協力したんですから、結局はそういう教育を受けていたんです。

817　それで、私はもう、「いぬちどぅたから（命は宝）」という言葉を、戦後はよく使いました。

戦争体験者としての意味をみつけるストーリー

［時期と状況］

720　私の教員時代には、頭の中には、何か、人生の節目・節目には、22名（白梅学徒隊の方が戦時で亡くなった数）の仲間のことがあった。

［出来事の配列］

721　これはもう、どうしても消せなかったですね。

722　これはね、やっぱり、就職したとか、結婚したとか、子どもができたとか、何かめでたいことがあったり、悲しいことがあったりすると、必ず仲間たちのことが思いだされてね、どうしても素直に喜んだりできないわけ。

723	そして、例えば自分が教員になったときなんかは、教員になりたいと言って、話していた人も何人かいるんですよ。
724	あの人も生きていたら、実際こうして仲間になっていたのかなぁとかね。
725	そんなことをね、嬉しいにつけ悲しいにつけ、仲間のことが思い出されてね。
727	戦場では、目の前で、色んな人が、目の前で爆撃を受けて死んでいくようなね、そういう悲惨なものをみているわけ。
728	もしかしたら、あの中に仲間がいたのかしら、とか考えたりしてね。
729	何で私が生き残ったのかな、とかね。
730	私の教え子たちは、「先生は学徒の話を何もしなかったよね。」って話してくれますよ。
732	でもね、「話をしなかったのではなく、話せなかったのよ。」と。
733	「平和へのみちしるべ」を書いて、そこからは、一般の人達にも話すようになったけれどもね。
	［評価］
870	最初はね、生き残って申し訳ないという気持ちがあったんです。
888	そういう亡くなった人たちが、仲間たちが、どこでどのように亡くなったのか、たくさんの、何て言うの、悲惨な状態をみているだけに、すぐ思い出す。
889	語るときにもね、最初はそうでした。
895	最近は、私は伝えるために生かされてると思ってます。
896	生きてるのが申し訳ないじゃなくてね。
897	そういう風に変わってきてる。

Matsakis（1999）は、悲惨な災害や戦争などに遭遇し、生き延びることができた人の中には、死亡した人や重傷を負った人を置き去りにして外傷体験を克服し、幸福を求めることへの躊躇、さらに強い感情反応を伴う悲嘆作業の回避といった心理的作用が働くと述べている。

C さんは、戦死した仲間を想い、嬉しい出来事にも素直に喜べなかったと語っているが、語り部活動を通して、戦争体験を伝えるために生きていると、生きている意味を見出している。

Frankl（1984）は、生きる意味や、果たすべき使命を自分が持っていると知っている人ほど、苦しみに耐えることができ、これらは精神的健康にとって欠くことのできない条件である、と述べている。

総合考察

Van der Kolk & Van der Hart（1991）は、トラウマ記憶という圧倒的体験の破片群を抱えている状況では、語りの言語に変形させ、物語記憶を当人に取り戻させることが必要であると述べており、トラウマを人格の全体の中に納める場所をつくることが寛解や回復につながるとしている。

A、B、Cさんは、各々適応過程は異なるが、語り部活動を通して戦争体験を心の中に収める場所を作る作業をしていると考える。

問題と限界点

分析方法には、個別の主観的世界に着目し、解釈をするナラティブ分析を用いたが、全体的に筆者の主観的解釈が色濃くでており、解釈する根拠となる裏付けが乏しく、客観性が損なわれている可能性がある。また、今回は体験の開示と共有のみに焦点を当てたため、解釈する際に他の要因を考慮できていないことが考えられる。

引用文献

蟻塚 亮二 ： 沖縄戦と心の傷：トラウマ診療の現場から．大月書店 2014

Frankl,V.E.：“Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee.” In Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie. 1984
（山田邦男・松田美佳訳：苦悩する人間．春秋社　2004）

Harvey, M. R.：An Echological View of Psychological Trauma. 未刊の手稿, Cambridge Hospital, Cambridge, MA,. 1990

Kastenbaum, R.：Death and bereavement in later life. In A. H. Kutscher (Ed.), Dath and bereavement, Springfield, IL : Charles C. Thomas. 1969

Lavob, W.：Language in the Inner City:Studies in the Black English Vernacular. The Univercity of Pennsylvania Press. 1972

Matsakis, A.：Survivor guilt－a self-help guide. Oakland : New Harbinger Publications. 1999

西倉 実季：外見の美醜をめぐるアイデンティティの変容過程―顔にあざのある女性のナラティヴ分析．年報社会学論集（17）；72-83, 2004

當山 冨士子・高原 美鈴・大城 真理子・田場 真由美・蟻塚 亮二・仲本 晴夫・大宜見 恵：
終戦から67年目にみる沖縄戦体験者の精神保健―介護予防事業への参加者を対象として―．沖縄県立看護大学紀要 14；1-12, 2013

Van der Kolk, B.A., & Van der Hart O.：The instrusive past : The flexibility of meory and the engraving of trauma. American Imago 48,；425-454, 1991

Worden, J. W.： Grief Counseling and Grief Therapy : A Handbook for the Mental Health Practioner (4th Ed). New York : Springer Publishing Company. 2008
（山本力（監訳）：悲嘆カウンセリング：臨床実践ハンドブック．誠信書房 2011）

吉川 麻衣子・田中 寛二：沖縄県の高齢者を対象とした戦争体験の回想に関する基礎的研
心理学研究 75（3）；269-274, 2004
吉川 麻衣子：戦争体験からの回復に影響を及ぼす要因に関する探索的研究―沖縄県高齢者の生活
史調査と調査研究を通して．研究助成論文集 39；131-140, 2004